



自分の道を見つけて
突き進む

六代桂文枝を襲名、創作落語に生きる

- 桂 文枝 ・落語家、公益社団法人 上方落語協会会長
- 上原 洋允 ・理事長

上方落語の大名跡、桂文枝を襲名。

7月16日、228作目となる創作落語「さよならサニー」をもって最初の襲名披露公演を行った。

桂文枝さんの落語家人生の原点は、関西大学の落語研究会「落語大学」にある。

その笑いはキャンパスから全国へと広がり、今も創作落語一筋の前人未踏の道を突き進んでいる。

◆「関西大学落語大学」の学長に就任

上原 桂文枝さんが関西大学の学生時代に仲間と創設された「関西大学落語大学」は、後輩たちに受け継がれて、今も活発な活動を続けています。文枝さんが落語の道に進まれるきっかけになったのは、関西大学1年次生の秋に、学内で桂米朝さんの落語に出会ったことでした。今年5月に日経新聞に連載された「私の履歴書」で、文枝さんは、「米朝師匠の落語には知的な香りがした」と、「巧みな話術と身ぶり」と、半分ほど年下の若者を自分の世界に引きずり込み、自在に沸かせている姿を見て衝撃を受け、自分にとって打ち込むべき対象はこれではないかと直感的にひらめくものがあった」と語っておられますね。

文枝 関西大学で学んだことが、人生の大きなポイントだったと思います。大阪の皆さんにも愛される大学で、学生の気風はバンカラ精神にあふれていました。進学校ではない商業高校の出身だったので、誰も知り合いがいなくて、よく図書館へ行って本を読んだりしていました。それもよかったです。そんなとき、他の落語家ではなく米朝師匠に会えたことが大きな刺激になりました。非常に知的で、そして若者も笑わせる。それまで見てきた漫才などの笑いとは違って、知的に笑わせるところが僕の琴線に触れたという感じです。

ちょうど国文学科の教授と有志の学生らが落語研究会を立ち上げようとしていたところでした。落語の研究にとどまらず、僕はなんとか実演したいと思いました。

上原 そこで、初代の実技学部長に就任されたわけですね。大学にあやかって関西大学落語大学の看板を掲げ、2年次生のときに学長に就任されました。そういうアイデアがまた面白い。

文枝 そうすると芸名もほしくなります。自ら「浪漫亭ちっく」と名乗り、他の学生の芸名も僕が全部つけました。

上原 芸術の中に芸能があり、芸能の一つに落語があります。巧みな話術と身ぶり手ぶりで観客を喜ばせ、そして感動させる。米朝さんの落語は、まさしくそういう芸能でした。それを目の当たりにして、「くすぶっていた自分にとって、身を打ち込むべき対象はこれなのではないか。直感的にひらめくものがあった」と。これは大きな収穫でしたね。関西大学に入られて、そこで文枝さんの将来への道が開けてきたわけです。

文枝 落語家は年季が求められる商売ですが、大学時代に過ぎた時間は、その後の落語家人生で大いに役立ちました。キャンパスの自由な雰囲気の中で、親しい仲間もできました。僕が落語家を志して桂小文枝(五代目文枝)師匠に弟子入りするとき、

仲間が大学前の通りに集まり、送別会をやってくれました。だから、彼らにブッシュされて、苦しくてもやめなかったと思うのです。

◆関西大学に入ったことで人生の方向が決まる

上原 「私の履歴書」を読みますと、ご両親の遺伝子を受け継がれていることも感じました。生後11カ月のときに亡くなられたお父さんは銀行員でしたが、洒脱な人柄で、演芸好きだったそうですね。当時の花月などで見てきたばかりの出し物を同僚に披露し、職場を沸かせておられたとか。文枝さんは高校時代に放送部から演劇部に移り、部長を務め、演出も手がけられた。そういう持って生まれた才能が、関西大学入学後に目覚めたのでしょうか。

文枝 中学時代までは、絵を描くことが好きな、どちらかと言えば内向的な子どもでした。ところが、大阪市立市岡商業高校(当時)に入学してから、持ち前の面白がりの面が表に出てきたのです。そのころ、家にテレビが入り、コメディ番組に夢中になりました。さっそく演劇部の親友と漫才コンビを組み、ラジオの素人番組に出演したりしました。



■対談



桂 文枝(かつら ぶんし)
1943年大阪府生まれ。63年関西大学商学部入学。落語研究会「関西大学落語大学」で「浪漫亭ちっく」として活躍、落語大学学長を務め、東西大学対抗落語大会などを企画。66年中途退学し、桂小文枝(五代目桂文枝)に入門。67年からラジオ深夜番組「歌え! MBSヤングタウン」で一躍人気者になり、テレビのバラエティ番組などに数多く出演。落語家として228本の「創作落語」を発表し、独自の世界を築く。2012年7月六代桂文枝を襲名。03年より上方落語協会会長。06年紫綬褒章受章。07年菊池寛賞、11年日本放送協会放送文化賞受賞。

演劇と漫才にのめり込んでいるうちに、成績が悪くなり、特に必修の珠算や簿記に対する興味を完全に失いました。就職先も思うようなところがなく、それじゃ勉強して大学に行ってみよう、クラスでただ一人、進学を希望しました。高校を出てすぐ働き、それで自分の人生が決まってしまうのが納得いかないというか、もうちょっといろんな世界を見てみたいという気持ちでした。もちろん、母一人子一人の家庭で、これ以上母親に苦勞をかけたくないという思いもありましたが……。

1年間、浪人生活を送りました。郵便局でアルバイトをしながら予備校にも行きましたが、結局どちらも辞めてしまい、秋からは図書館に通うようになりました。受験時代の体験は、後にラジオ番組を持ったときに役立ちましたね。

上原 お母さんは終戦後、ずいぶん苦勞されたことと思います。それでも、明るさを失わずに、一人息子をお育てになった。私の母もそうでした。私は6人兄弟の末っ子で、6歳で父親を亡くしました。香川県の田舎の小地主でしたが、戦後は食べるもの

「宇宙の大きさに比べて、人間の人生のなんと小さなものか」。どうせ小さな人生なら、決断すべきときは大きく勝負に出るように、この言葉が僕の背中を押してくれました。

もなく、私は中学校を中退して大阪へ働きに出てきて、城東区の機械工場に勤めながら定時制高校に通いました。

文枝さんが米朝さんの落語に接するまで、何をやりたいのかわからず、もやもやした気持ちでくすぶっていたとおっしゃったことはよく分かります。私も弁護士になりたいという確固たる目標を持って大学に入ったわけではありません。将来の方向や進むべき道は、入った大学によって大きく左右される面があります。私は法律学校としての良き伝統がある関西大学に入学し、先輩にも恵まれて、法律の道に進むようになったのです。

父親を早く亡くしたこと、母親が苦勞して育ててくれたこと、そして関西大学に入って方向性が決まったことなど、お互いに似ているところがありますね。

◆落語の世界に飛び込むことを決断

文枝 理事長は勉強一筋ですが、僕も初めは勉強して母を楽にさせようと思ったけれど、落語に出会ってしまい、その魅力に取りつかれたという感じですね。

上原 持って生まれた遺伝子があり、学生時代に才能が芽生えて、それに目覚めて努力されたということですよ。落語家を本業にできるかどうか、お客さんはお金を払ってまで聴いてくれるかどうか、必ずしも自信があったわけではないけれど、大学生活を切り上げて飛び込んでいかれた。その飛び込みは、なかなか普通じゃできないことです。将来、成功するかどうか全く分からない、今の文枝さんの姿など想像もできないわけですから。それは一人息子を育ててきた親にしてみたら、たまらなかつたでしょう。ご本人も、そこが大きな決断だったと思います。

文枝 今のようなお笑いブームではなかったですからね。落語は明治の中ごろに最も栄えて、それから衰退の一途をたどり、僕が弟子入りしたころは上方の落語家は20人いるかいなかったかでした。

上原 今はかなりの数になっているのでしょうか？

文枝 上方落語協会の会員は230人を数えるまでになっています。

上原 文枝さんの頑張りとともに、上方の落語家も増えてきた？

文枝 僕の場合は、ラジオの深夜番組が大ヒットしていくのうまく乗れたのです。ちょうど、団塊の世代が受験期に入っていました。

◆自分の人生は自分で決断して生きていこう

上原 古典落語から創作落語の道に進まれたことだけでなく、先代の桂文枝師匠とは、少し芸風が異なるように感じるのがが……。

文枝 米朝師匠の知的な香りの漂う落語を知ってから、いろんな落語家の囁を聴くようになりました。そこで五代目文枝師匠のはんまりとして、非常に色っぽい、大衆的な落語に引かれるようになりました。あの上方らしい柔らかさと華やぎのある芸風は魅力です。それで弟子になったのですが、弟子の中では異色だったと思います。

上原 文枝さんの創作落語集を拝見しましたが、言葉と身ぶりだけで人を引きつけていく芸のすごさを感じました。既に220

本以上の創作落語を発表されたそうですね。やはり並みの人じゃないですよ。それだけのことができるのは、才能に磨きをかけてこられたから。努力なしにできるもんじゃないです。学生時代も、創作的なことはしておられたのですか。

文枝 とても高座にかけられるような出来ではないですが、実験的にやっていました。学生さんの前でやる時は、やはり学生さんに喜んでもらえるようなものを披露したいと思って。古典落語の世界は、今から50年近く前でも、もう遠い昔の話でした。ですので、学生がアルバイトで経験したようなことを落語に盛り込むようにしました。

僕自身も大学時代にアルバイトをしてたくさんの人を見てきましたし、この世界に入ってから視聴者参加番組でいろんな方とお会いしてきました。その経験が基になっています。落語を聴くお客さんは現代を生活している人々であり、落語にも今の笑いが必要です。落語というものは時代に合わせて進化していくものだという考えを、ずっと持ち続けて創作に励んできました。上原 新しいことをしようとするれば困難が伴いますし、決断が要求されます。古典落語を封印して創作落語で勝負しようと、大きな決断をされたわけですね。

文枝 そうです。自分の人生は自分で考えて生きていくしかありません。小学校5、6年生の担任だった渡辺章という先生の言葉が、いつしか僕の人生訓になっています。卒業のとき、サイン帳みたいなところに書いていただいた言葉です。「宇宙の大きさに比べて、人間の人生のなんと小さなものか」。みんなに同じ言葉を書かれたのかと思っていたら、違ったのです。母一人子一人の状況にめげずに頑張るって生きる。そんな意味も込められていたと思います。渡辺先生は若くしてお亡くなりになりましたが、どうせ小さな人生なら、決断すべきときは大きく勝負に出るように、この言葉が僕の背中を押してくれました。

◆自分の得意なものを何か一つ身につけよう

上原 関西大学には今、体育会のクラブ・単独パートが49、落語大学も含めて文化会が26、学術研究会が22あります。私は長年、学術研究会の一つ、法律相談所の学生と一緒に全国各地を回って無料法律相談を行ってきました。私は学生に、自分の進むべき道を早く見つけて、それに向かって勉強するように言い続けてきました。

文枝さんのように、それぞれの分野で一流の仕事をしている先輩の存在が、学生にとっては大きな刺激になり、目標になります。この機会に、学生に対してメッセージをお願いします。

文枝 月並みな言葉ですけども、「よく遊びよく学べ」ですね。遊ぶといってもいろんな遊び方があり、学生時代にしか経験できないことがいっぱいあります。スポーツを楽しむことや、クラブ・サークルの活動もそうでしょう。皆と交流を深めて、自分の得意なものを何か一つ身につけることが、将来きつと役に立ちます。

関西大学には130年近い歴史があり、幅広いところで先輩・後輩のつながりがあります。どこの放送局へ行っても、海外へ行っても、関西大学の先輩がいて後輩がいて、全然知らない人

私も弁護士になりたいという確固たる目標を持って大学に入ったわけではありません。将来の方向や進むべき道は、入った大学によって大きく左右される面があります。



上原 洋允(うへはら よういん)
1933年香川県生まれ。57年関西大学法学部卒業後、大阪市立大学大学院法学研究科に進み、58年司法試験合格、59年同研究科修了。61年から弁護士を開業。関西大学司法試験受験研究会で指導に当たり、関西大学法律相談所の顧問を務める。95年大阪弁護士会会長、近畿弁護士会連合会理事長、日本弁護士連合会副会長。2004～06年関西大学大学院法務研究科(法科大学院)特別顧問教授。03～06年関西大学校友会会長。関西大学常務理事、専務理事を経て、08年10月理事長に就任。

ともすぐに仲よくなれるのは、この大学のすごいところだと思います。

上原 さて、六代桂文枝を襲名されてまだ日が浅いですが、桂文枝としてのこれからの抱負をお聞かせください。

文枝 まだ桂文枝という名前には慣れないのですが、文枝を襲名してよかったかどうかというのは、これは後の人々の判断によると思います。自分で自分の流れを変えようと、自ら決断したこと。これから先、落語家の人生を芸一筋で行くためにも、この襲名は大きかったんだなあと思っています。

よく皆さんから、桂三枝の名がなくなることはもったいないなどと言っていて、それはそれでありがたいのですが、自分としては、この決断がよかったんだと思えるように頑張るつもりです。

上原 文枝師匠は自分の道を自分で開いて突き進んでこられました。これからも第一人者として、創作落語の道を究めてください。本日はどうもありがとうございました。